

「書」の生成と評論

——中國書論史序説——

杉 村 邦 彦

文字は人間の言葉を書き表わすために作られたものであるから、書かれた文字は正確に讀みとられることが必要であり、またそれで十分でもある。傳達手段としての文字は、讀者にその文章内容を正しく傳え得たならば、その使命を一應達成したことになる。

ところが文字を書くという態度が多少とも反省され、また書かれた文字の中に、單なる記號性を越えて何らかの視覺的な意義を認めるという傾向が、既に文字原始の段階に於てあったとすれば、後世書が一箇の藝術として生成發展し得る契機は文字そのものの中に胚胎していたといえよう。いつでもまたこの國でも文字書寫は、常により正しくしかもより美しくあることが望ましいから、そのための努力は大なり小なり拂われてきた。とりわけ東洋の漢字世

界では、漢字固有の造形性と筆墨の精能をもとに、人間の心情を吐露する好個の場として書の藝術を開花せしめるに至った事實は、類まれな例として頗ぶる注目値する。

中國では詩と畫に書を加えて藝術表現の三位一體と考えられ、實用の文字書寫と並行して優れた書寫表現は常に審美眼の對象として尊重されてきた。これは單に書の歴史のみならず、廣く中國に於ける美意識の發展と深く結びついており、文化史ないしは精神的な觀點からも等閑視し得ない一分野であるといえよう。この小論は、かかる立場から中國に於て書が藝術として認識されるに至った経緯を明らかにするとともに、書に對する評論がいかなる形式でいかなる基準によつてなされてきたかを、その初期の段階に於て検討しようとするものである。

一 漢代に於ける書の尊重と鑑賞

一口に「書」と言っても、その意味する概念は甚だ複雑多義にわたっている。古く易の繫辭下傳に「上古結繩而治、後世聖人易之以書契、百官以治、萬民以察、蓋取諸夬」とある「書契」は「萬事を決斷する」文字の效用について言ったのであり、周禮地官保氏が國子に教えた六藝の中の「六書」は文字構成の原理六種について述べたものである。また釋名に「書庶也、紀庶物也、亦言著也、著之簡編、永不滅也」とあり、説文にも「書箸也、从聿者聲」或いは「倉頡之初作書、蓋依類象形、故謂之文、其後形聲相益、即謂之字、……箸於竹帛謂之書」(同)と説明されているように、元來「書」の字は筆で以て文字を竹帛に書きつける行為を意味している。更に文字を書き連ねたものとしての經書典籍を總稱して書といった例に「書者五經六籍總名也」(史記禮)(書案隱)があり、上古の書を意味する尙書が單に書と稱されるほか、書簡もまた單に書と稱されている。このような意味に於ける「書」字の用例は先秦の典籍に頗ぶる多いけれども、後世のように書と言ってただちに藝術性を意

識することはほとんどなかったものと思われる。ところで漢書藝文志や説文序によると、古い文字を改良して新しい字體を作り、記憶するのに便利な形に編纂したものがいくつか見えている。例えば周の宣王の時に太史籀が大篆十五篇を作ったこと、秦の始皇帝の文字統一の立役者となった丞相李斯が、大篆を小篆に改めて倉頡篇を作ったなどの事實があり、藝文志では一括して「凡小學十家、四十五篇」と記している。これらは何れも字體の典型を示して記憶しやすくする必要から、筆法には十分注意が拂われたものと考えられる。けれども果してどの程度藝術的な意圖に出たものかは明らかでなく、文字の記憶と正確な書寫能力が古今を問わず基礎教育の第一歩であったことを知るのみである。

さて漢代になると、優れた文字書寫が實用と鑑賞の両面で尊重されることになる。まず書に巧みであることは事務能率を高めるので、任官の條件として書の巧みさが要求された。前漢の初め蕭何が法律を定めて、學童の九千字以上を諷誦することのできる者を史とし、八體^①を書かせて成績第一の者を尙書御史、史書令史に採用した(漢書藝文志)。これ

は文字の記憶能力とともに書寫能力を併せ課したのであらう。また張安世は書を善くするを以て給事尙書の官に用いられ、王尊、嚴延年、馮燎なども史書を善くしたことが何れも漢書に特筆されている。^⑧ 史書は當時の實用的な書體であつて、これを善くすることは任官のための一つの捷徑でもあつた。もつともその多くは事務の繁雜な獄吏などに當てられ、身分はどちらかと言へば卑賤視されていたようである（漢書貢禹傳、新書時變篇、^⑨）。職業的技能としての能書は、何よりも正しく読み易くあらねばならぬ實用本位のものであり、もし誤字を犯せば舉劾を蒙らねばならなかつたのである（漢書藝文志）。

次に鑑賞的な方面を見ると、漢書楚元王交傳の「好書、多材藝」、同張蒼傳の「好書律曆」、淮南王安傳の「爲人好書鼓琴」などの記述に見られる「書」の概念は甚だ曖昧であるが、單なる書籍というにとどまらず、多少とも書法に對する關心を認めることができよう。同じく前漢の成帝のころ谷永は筆札を善くして、樓君卿（護）の辯舌とともに長安に並び稱せられた（漢書樓護傳）。また陳遵は性、書を善くし、人に與えた尺牘は、もらった人みな大切に保存して光榮と

したといわれる（漢書本傳）。このような事實に照して、少くとも前漢の時代には、既に書かれた文字の獨自の美しさが注意されており、文字書寫がその實用性とともに、鑑賞の對象としても尊重された最も早い實例をここに見出すことができる。^⑩

後漢になると書によって名の傳えられる人物が多數現われ、各書體について専門の名家が輩出することとなつた。いま晉の衛恒の「四體書勢」をもとにして主要な人物を擧げてみよう。まず篆書では建初年間に曹喜があり、秦の李斯的の法を少しく變えたといわれる。漢末から魏にかけては邯鄲淳が出て曹喜の法を學んだ。熹平石經で有名な蔡邕は李斯、曹喜の法をとつて新しい書法を打出したが「精密閑理」の點で淳には及ばなかつた。魏の韋誕も淳を師としたが、やはりそれには及ばなかつたといわれる。隸書を善くした人には、靈帝の時に師宜官が知られている。彼は靈帝が天下の書に巧みな者を集めて鴻都門に召した時、數百人が集つた中で第一等になつた名家である。大字と小字をとともに善くし、大は一字徑丈、小は方寸千言といわれた。師宜官の法を學んだ梁鵠は書を以て選部尙書に至り、魏の武

帝は梁の書を帳中に懸け或いは壁に釘つて賞玩したという。彼の弟子に毛弘があり、八分の法を以て祕書に教えた。このほか漢末の人左子邑の名も知られている。

次に草書は「漢興つて草書あり、作者の姓名を知らず」とされる。元來簡易と敏捷から自然に生れたもので、尺牘や草稿など日常的な書寫にのみ使用された。ところが後漢になると草書は本來の便宜的なものから次第に獨自の美しさを備えるようになった。前漢では草書に巧みであつたという人は未だ史上に現われてこないが、後漢になると草書の名手と目される人がかなり多く登場してくる。まず光武帝から明帝のころ、北海敬王劉睦が史書を善くして當世の楷則となつた。彼が病に臥したとき、明帝は驛馬を馳せて草書の尺牘十首を作らせたということが後漢書の本傳に見えている。章帝の時には杜度が出て書の才能が認められ、上奏の文章をみな草書で書いたことは有名であり、度の法を學んだ崔瑗もその子寔とともに草書を善くした。これに續く張芝は名門の出身であるが一生仕官せず、學問の餘暇に書藝を好み、ただ書によつてのみ名を知られている人である。筆を下せば必らず楷則を爲すほどの精熟した技能の

持主で、その書する所のものは小紙片でも珍重された。彼の門下に出た韋誕は彼を「草聖」と呼び、芝の弟昶も兄につぐ名手で當時「亞聖」と稱された。芝の弟子には姜孟穎、梁孔達、田彥和および韋誕が有名であつたが、何れも昶には及ばなかつた。このほか張芝とはほぼ同期の人に羅叔景、趙元嗣、張超などの名も記されている。後漢になるとこのように各書體にわたつて書の名家が多數輩出したが、とりわけ草書の發達は著しく、張氏や崔氏の書跡は世に模楷とされて廣く流行するに至つた。

ここで翻つて漢代に於ける傳統的な文字觀を尋ねてみると、許慎の説文序に

蓋文字者、經藝之本、王政之始、前人所以垂後、後人所以識古、故曰本立而道生、知天下之至赜而不可亂也

とあつて、文字が經藝の根本、王政の始めであることが述べられ、また慎の子沖の「上說文解字書」にも同様の趣旨が述べられている。五經の道を昭炳ならしめる根本としての文字は、古來の傳統がそのまま繼承され、しかも正確に讀みとられなければならない。これによつて許慎が當時通行の隸草を捨てて敢えて小篆をとりあげ、古文と籀文を參

して、字義解釋の範を示そうとした趣旨が明らかである。

靈帝の時に出了た趙壹は、かかる傳統的な文字觀に立つて、當時の草書の流行を非難し、「非草書」を著している。後漢書の本傳によると彼は豪傑肌の文學者で、しばしば時勢を慷慨する上奏を行っているから、非草書も恐らく同様な立場から書かれたものであろう。その論旨は、彼と同郡の士梁孔達と姜孟穎（何れも四體書勢に見える）が張芝の草書を慕うので後學の徒も競つてこの二賢を慕い、幼少より倉頡篇や史籀篇を廢して杜度、崔瑗を法とし、お互いの書簡にもあわだしくて草書するに及ばずと但書などするのは、簡易と敏捷から生れた草書の本旨に反している、というのである。それにも拘らず現實には寢食を忘れて研鑽し、十日に一筆、月に數丸の墨を費やし、領袖は墨染めの如く唇齒も常に黒く、地面や壁面にまで書いて習うという有様であつた。趙はこのような努力を、模倣者の醜を増すにすぎないといつて、更に、

且草書之人、蓋伎藝之細者耳、鄉邑不以此較能、朝廷不以此科吏、博士不以此講試、四科不以此求備、徵聘不問此意、考績不課此字、徒善字既不達於政、而拙草無損於

治、推斯言之、豈不細哉、

草書の人を一般に伎藝の細者と斷じ、社會に於て正式に通用しないこと、及びその巧拙が政務に直接影響しないことなどを理由に草書の流行を非難している。しかし彼はその反面、書のもう一つの性格にも多少注意を拂つて、例えば、凡人各殊氣血異筋骨、心有疏密、手有巧拙、書之好醜、在心與手、可強爲哉、若人顔有美惡、豈可學以相若耶、といひ、書が人間の肉體と同様に心手の資質として先天的に性格づけられることを述べたあと、杜度、崔瑗、張芝等は何れも超俗絶世の才能を持ちつつ、博學の餘暇に手を書藝に遊ばせたことを辯護している點も見落してはならない。

靈帝を中心とする時代は藝術の各分野に新思潮の勃興した時期であつて、書に於ても漢碑の名作はほとんどこの時期に集中している。それは帝自ら書法を尊重して、書に巧みな者を優遇したからに外ならない。

初（靈）帝好學、自造篆義篇五十章、因引諸生能爲文賦者、本頗以經學相招、後諸爲尺牘及工書鳥篆者、皆加引召、遂至數十人（後漢書 蔡邕傳）。

光和元年（一七八）靈帝は始めて鴻都門學生を置き、州郡三公に敕して、尺牘辭賦を能くし、また鳥篆を書するに巧みな者を擧げて試験をしたところ、至る者千人であつた（後漢書靈帝紀及注）。靈帝によつて開かれた鴻都門學は、經學本位の太學に對して、官途としては一般に輕視されたが、頗ぶる藝術的傾向を帶びており、文章書畫伎藝の士が雲集したといわれる。^④この時試験官となつたのが蔡邕であつた。彼はもとより博學多藝の才士であつて、辭章を好み書畫音律を善くして天文數術にも明らかであつた（後漢書本傳及張懷瓘書斷）。靈帝はかつて蔡邕に詔して赤泉侯五代の將相を畫かしめ、兼ねて讀及び書を爲らしめたところ、その書畫に讀を合せて三美の稱を得た（歷代名畫記卷四引東觀漢記并孫暢之述畫記）。また彼には書に關して「篆勢」の著のあつたことが本傳に見え、その文章が今日傳わっている。

既述のように草書は杜度、崔瑗、張芝などの名家によつて藝術的に洗練されたが、このような趨勢は自ら鳥篆や隸書にも藝術性を見込むこととなり、靈帝の時には草書の尺牘から篆隸の碑版に至るまで各々盛況を呈していたものと思われる。

崔瑗（七七—一四二）は「草書勢」なる文章に於て、草書の筆勢を讀して、

旁點邪附、似蜩蟬掎枝、絕筆收勢、餘綫糾結、若杜伯捷毒、（看隙）緣巖、騰地赴穴、頭沒尾垂、……

と形容している。書を日月風雲鳥獸草木など自然の動態に譬えて評説することは、ほかに蔡邕の篆勢などにも見られ、書論の原初的な形式がこのようなものであつたことを示している。因に崔瑗の草書勢は趙壹の非草書にも「故其讀曰、臨事從宜」としてその一句が引かれており、よほど有名であつたことが窺われる。また班固が弟超に與えた書簡（書斷下引）には、「得伯張書、蕙勢殊工、知識讀之、莫不嘆息、實亦藝由己立、名自人成」とあつて、章草を善くした徐幹（伯張はその字）の書の筆勢が稱美されている。漢末には呉人張紘が文學を好んで楷篆を善くし、彼に對する孔融の返書にも、「前勞手筆、多篆書、每舉篇見字、欣然獨笑、如復覩其人、也」（三國志張紘傳注引吳書）と記され、書がその筆者と結びつけて鑑賞されている。これらの諸例を通して、後漢には既に書の筆勢を自然現象に譬えて論讀したり、或いは書の内に筆者の性格心情を洞察するといふ風潮のあつたことを知る。

るのである。

二 魏晉に於ける書意識の向上

魏の時代に出た書人のうち、後世に最も大きな影響を及ぼしたのは鍾繇である。彼は後漢の獻帝のとき孝廉に擧げられてより、魏の建國に當つて曹操を助けて軍功があり太傅にまで至った。彼は元來魏の大官としてよく知られていたが、魏志の本傳には彼が書に巧みであつたことは少しも記されておらず、胡昭の傳に胡昭、邯鄲淳、衛觐、韋誕等と並んで書名が見えているにすぎない。ところが後世になると専ら書の方で有名となつた。まず彼の外甥に當る荀勗が晉の武帝の時に祕書監となり、書博士を立てて弟子を置いて教習するに鍾繇と胡昭の法を以て標準とした(晉書荀勗傳)。王羲之が少くして師事した衛夫人と王廙は何れも鍾法を善くし、羲之自らも鍾繇に範を求めたことは後述の通りである。その後南朝の書論では張芝、王羲之と並べて鍾繇を古今の三筆の一人に數えている。

南朝宋の羊欣の「古來能書人名」には、鍾の書に三體ありとして銘石書、章程書、行狎書を擧げている。この中第

三の行狎書は「相聞する者」と説明されており、尺牘用の行書であつたと考えられる。梁の庾肩吾の「書品」にも「許昌の碑を妙盡し、鄴下の牘を窮極す」とあつて、彼が碑銘とともに尺牘を善くしたことを記している。四體書勢の隸書の項には、

魏初有鍾胡二家、爲行書法、俱學之於劉德昇、而鍾氏小異、然亦各有巧、今大行於世、

と見え、劉德昇の作つたという行書の法は、鍾繇や胡昭に繼承され、漢代以來の草書と結びつくと尺牘用の書風として独自のスタイルの美しさを備え、以後書法の主流をなしてゆく。漢代に紙の發明があり、魏の曹操に始まる禁碑の令が厳しくなると、書の美しさは主として日常の尺牘に表わされることとなつた。行草體の流行と相俟つて、碑版から尺牘への移向は魏晉南朝の書の大きな特色である。魏晉の際に尺牘を善くした人士をここで少し拾つてみると。まず胡昭の尺牘が必らず模楷とされたことは魏志管寧傳に見えており、同じく齊獻王攸も尺牘を善くして世の楷とする所であつた(晉書本傳)。古來能書人名によると、衛瓘は張芝の法に父衛觐の法を加味して新たに草藁を作つた。草藁と

は相聞（尺）の書であるという。また楊肇は草隸を善くしてその尺牘は必らず珍重され、杜度の子孫である畿、恕、預の三代も俱に草藁を善くしたことが記されている。

この期の重要な書論としては、衛恒の「四體書勢」があり、晉書の本傳に收録されている。恒の祖父覲は魏の太祖武帝に仕えて尙書となり、古文鳥篆隸草を好んで善くせざる所がなかった（魏志本傳）。父瓘も晉の武帝に仕えて尙書令を拜し、敦煌の索靖と並んで草名があり、「一臺二妙」と稱せられた。衛夫人は恒の從妹に當り、恒の弟宣、庭及び恒の子璜、玠等も書名が知られているから、衛氏は實に累代書の家法を傳えており、恒自身も草隸を善くしたことが本傳に記されている。

さて四體書勢の四體とは古文、篆、隸、草であり、八分、行、楷はみな隸の中に含まれている。その内容は各體について、初めに字體の起源沿革を記して漢魏の際にその體を書するに巧みであった人物を挙げ、終りに讚を附している。總じて記述は師承關係や優劣の比較などに多くの關心が拂われ、書の内容そのものに關する評句は未だ至極簡單であるといわなければならない。しかしその中から多少

とも書を評する基準となつた要素を拾うならば、殺（字）、（字）の、難、易、書、線、の、肥、瘦、筆、勢、の、得、失、結、字、の、疏、密、な、どを擧げることができる。次に論讚の部分を見ると、古文に

恒自作の「字勢」を採ったほかは、蔡邕の「篆勢」鍾繇の「隸勢」崔瑗の「草書勢」を引用して之に代えている。冒頭に、太康元年發掘の汲冢書⑤の一卷に楚事を論ずるものあり、その書法最も巧妙なるが故にこれを讚美するため、前賢の作を厠（と）ぐに足らざるを愧じつつ、古人の象を存するを冀（望）つて「字勢」を作った、と述べている。これによると、衛恒は汲冢書の發掘を契機に、先人の書論的著作に倣（まね）つてまず古文を讀する「字勢」を作り、更に篆隸草の序を書き加えて今日見る四體書勢の體裁をとるに至つたものと考えられる。⑥何れにせよ衛恒の「字勢」が漢魏以來の傳統をうけて、特に筆勢論の立場から書かれたことは明瞭である。

一般に運筆の變化から導かれる自然な筆勢の流露は、書線の持つ著しい特色であり、それは觀者の眼に勢、や、力、の感覺として鑑賞上第一の基準となる。初期の書論が筆勢論を主要な内容とするのは、筆勢が書の特長として相當早くより意識されていたからであらう。南朝宋の王愔の「文字志

目」には「書勢五家」と見えており、これは筆勢論を主とする書論的な文章ではなかったかと想像される。晉代に於ける筆勢論の展開は、成公綏の「隸書體」、索靖の「敘草書勢」、楊泉の「草書賦」、劉劭の「飛白書勢銘」、王珉の「行書狀」等によって見る事ができ、これらは何れも特定の書體をとりあげて、筆勢の様々に變化する姿を、或いは自然の動態に比喻を求めて評説し、或いは自己の觀念の中にとらえようとしている。ここには當時の自然や人間解釋の一つの現われを認めることができる。

由來、中國古代の文字の擔い手を見るに、殷周時代に於ては史官であつた。文字は史官が占卜を行ない、歴史を記述するための神聖な道具とされ、文字を書し刻する行爲はそのまま祭政一致の古代神祕主義の實踐に外ならなかつた。次いで秦漢の專制國家は史官の地位の没落ととも、大量の有能な官僚書記官を要求した。儒學を修める官僚士大夫にとって、文字は聖賢の道を載せる用具であつたし、直接政務に携わる書記官にとって、文字は役所文書作成のための職業的技能であつた。何れにせよ彼等は文字を通して職務に忠實であらねばならず、またそれ以外に生きる術

を知らなかつた。古代の文字は常に個人の生活の場を越えて、國家爲政者の手に委ねられていたといえよう。

しかるに秦漢の古代帝國が崩壊すると、魏晉の貴族、とりわけ文人と呼ばれる新しい型の人間が登場してくる。^⑥從來指摘されているように、漢代の選舉制度の不備は情實の入込む所となつて官吏の地位の世襲化を招き、一方土地、人民の兼併による豪族化と相俟つて、政治的にも經濟的にも固定勢力が形成され、これがやがて魏晉の貴族へと變身してゆく。彼等も本質的には官僚の身分ではあつたが、漢代の官僚とは違つて、門閥の地盤の上に立ち豊かな財力を背景としている。それはもはや漢代の官僚のように天子の前にただ能吏を以て自ら任ずる者ではなく、生活の據り所を自己自身の内に持つ自由人であつた。政治意識や道德觀念に代つて、人生の意義や永遠の問題が彼等の最大の關心事となつた。個人の自覺ないし人間性の發見が藝術の發展に不可欠の條件であるとすれば、眞の意味に於ける藝術史は魏晉の時代にその開幕を告げたといえよう。單に學徳完備しているだけでは十分でなく、藝術に對する豊かな理解と修得を兼ね備えた者でなければ全き人間に非ずと

する時代思潮のものに、文章書畫音律工藝彫刻などの廣い分野にわたって、その才能を發揮した多藝多才の人士を多數輩出している。このように士大夫が自ら進んで藝術に携わることになると、各藝術に關して思索が深められ、理論化が試みられて、曹丕の「典論」、陸機の「文賦」以下の文學論や、顧愷之に始まる畫論の展開を見るに至った。書の藝術的覺醒は實作上に於ても評論上に於ても、單にそれだけ孤立した現象ではなく、文學、繪畫、音樂など藝術史一般の動向と軌を一にするものであったのである。

東晉の初期、王廙は少くして文名があり、音樂射御博奕すべて善くせざるものはなかったが、とりわけ書畫は晉代第一と稱せられ、畫は明帝の師となり、書は王羲之の法となった（晉書本傳、王僧虔論書、書斷）。かつて廙は從子羲之のために孔子十弟子圖を畫き、これに讀して次のように云った。

余兄子羲之、幼而岐嶷、必將隆余堂構、今始年十六、學藝之外、書畫過目便能、就余請書畫法、余畫孔子十弟子圖以勵之、嗟爾羲之、可不勗哉、畫乃吾自畫、書乃吾自書、吾餘事雖不足法、而書畫固可法、欲汝學書則知積學可以致遠、學畫可以知師弟子行己之道、又各爲汝贊之

（名畫記）
卷五

この逸話は世説新語言語篇の注に、「羲之少くして朗拔、叔父廙の賞する所となり、草隸を善くす」とある記事と相應するものである。書を學ぶにはまず學問を積んで遠きをきわめるべきことを知り、畫を學ぶには孔子や弟子たちが自らを開拓した方法を知らねばならないとしている。廙は書の根底に技法以上のもの、即ち學問的教養を重視したことが明らかである。かつて書は聖賢の道載せる用具として政教の手段にすぎなかったが、今や優れた書の條件として學殖の裏付を要求するに至ったことは、書が文人の藝術として發達すべき一つの方向を提示したものとえよう。一般に中國に於ける優れた藝術の作者は、萬卷の書を讀み萬里の路を行つた彦哲でなければならぬとされるが、廙が書に於て重視した「積學致遠」は、ただ書にとどまらずあらゆる藝術の思想的基盤となるのである。

廙に教を受けた王羲之は、「風流の才士、蕭散たる名人」（顏氏家訓）と評され、もとより單なる技巧の士ではなかった。^⑧蘭亭雅遊の主催者としてその文名もとより高く、畫にも雜獸圖、臨鏡自寫眞圖、扇上畫人小人物などの諸作

の傳わっていたことが名畫記卷五に見えている。書に技法以上のものを重視する傾向はそのまゝ羲之に繼承され、その名筆の背景となつていふと思われる。ところで羲之が書に關していかなる思想を持っていたか、彼の書論として信憑すべきものの少ない今日、遺憾ながら十分知ることとはできない。ただ法書要錄卷一に收める「晉王右軍自論書」には、

吾書比之鍾張、當抗行、或謂過之、張草猶當雁行、張精熟過人、臨池學書、池水盡墨、若吾耽之若此、未必謝之、……尋諸舊書、惟鍾張故爲絕倫、其餘爲是小佳、不足在意、去此二賢、僕書次之、

といつて、彼は古人の書を多く學んだ中でも特に鍾繇と張芝を尊敬して、しかも自分の書も之に次ぐという自信の程を示している。羲之の書の評價については、宋の羊欣が「貴越群品、古今莫二、兼撮衆法、備成一家」と評した言葉そのまゝに、後世傳統的書法の典型として尊重されるに至つたことは周知の事實であるが、彼の書名は既にその當時から高く、羲山の扇や換鵞の傳説、庾亮に與へた彼の書が張芝にも匹敵するほど見事であつたこと（以上晉書本傳）、或いは穆

帝が彼の上奏文を張翼に命じて忠實に臨寫させたこと（宋虞承書表）などの逸話は、彼の書がいかに珍重されていたかを物語っている。次に、それでは羲之の書が當時の人の眼にいかなる風格のものとして映じていたかが問題となるであろう。これを知る直接の資料は存在しない。しかしただ一つここに私がその手がかりとして擧げたいのは、世說新語容止篇に見える次の言葉である。

時人目王右軍、飄如遊雲、矯若驚龍、

これは「容止篇」に見えるところから、一般には彼の容貌風采を評した言葉と解されている。ところがこの言葉から受ける印象は、どうも容止よりもむしろ彼の書を評したものとする方がより適切な感がある。現に唐代に作られた晉書では「遊雲」を「浮雲」に作るが、とにかく羲之の書の筆勢を評した言葉としてゐる。ほかにこれと類似的言葉を書論の中から探すと、「蓋草書之爲狀也、婉若銀鈎、飄若驚鸞」（索靖敘草書勢）、「飄若雲遊、激如驚電」（張弘書斷）などがあり、また「王右軍書、字勢雄強、如龍跳天門、虎臥鳳閣」（梁武帝評書）と、ここでは羲之の書が龍に譬えられている。人の容止を驚龍に譬えることはほとんどその例を見ないのに

對して、書を雲や龍に譬えることは古くからよく行われている。従つて世説のこの言葉も當時の人が羲之の書を評した言葉と考えてよいかと思う。羲之の飄々として捉え所のない高逸な人格がそのまゝ書の上に現われ、その評價がこのような言葉によつて行われていたものを、劉義慶は世説の編纂に當つて容止篇に混入したものであると一應理解して、暫らく疑問を存しておく。

ところで唐の孫過庭が、「東晉の士人互いに相陶淬し、王謝の族、郗庾の倫（ともがら）に至つては、縦いその神奇を盡さざるもみな亦その風味を挹む」（書譜）といった言葉を待つまでもなく、羲之の周圍には多くの書の名家が集つて互いに啓發しあいながら、この期特有の書の美しさを發揮するに至つた。例えば瑯邪の王氏は羲之、獻之より始めて一族こそつて書名が傳えられ、謝氏には尙、奕、安等があり、羲之の妻は郗氏の出で、鑒、愔、曇、超、儉、恢等が知られ、庾氏にも亮、惔、翼、準があつて、能書の人士は枚舉に暇がないが何れも當代を代表する名士であつた。彼等が書をいかなるものと考え、またいかに尊重したかについては、いくつかの逸話が傳えられていて、その一端を窺うことができ

る。

東晉の太極殿が完成した時、その殿牌の揮毫を命ぜられた王獻之は使者に向い、「その殿牌を門外に棄てておけ」と怒鳴りつけたという（世説方正篇）。韋誕の凌雲臺の故事にも見られるように、殿牌や碑銘の揮毫が筆吏の末藝として一般に輕視される傾向が古くからあり、獻之はそのような扱いを受けたことに憤りを感じたものと考えられるが、更にそのもう一つ奥には、書を何ものにも奉仕しない自からのものとする立場、即ち、あくまでも藝術として扱おうとする意識が見られる。同じこの獻之がかつて簡文帝に十紙ばかりの牋を上り、その最後に題して「私のこの書は甚だ氣に入りの作ですから、大切に保存して下さい」（虞祗論書表）といった言葉が、何よりもそのことを立證している。庾翼の書は少時羲之と名を齊しくしていたが、その後羲之の方が上達して廣くもてはやされることとなった。そこで翼は任地の荊州から都下に書を与え、「小兒輩は家雞（翼）を賤しみ野鷺（羲之）を愛し、みな逸少（羲之の字）の書ばかりを學んでいるが、私が還るのを待つてその優劣を比べるべきである」といっている（王僧虔論書）。翼は羲之の書の流行に、一種の嫉妬を抱い

ていたのである。風流宰相の名を得た謝安は、書の上でも二王とかんがりの親交があった。羲之が安に與えた書（全晉文22）

に「復與君斯眞草、所得極爲不少、而筆至惡、殊不稱意」とあつて、安に眞草の書を書き與えている。また書斷にも

羲之が安に對して「あなたは書を解する人だが、書を解する人に遇うことは尤も難しいことです」（謝安の項）といつてお

り、安が羲之の書のよき理解者でもあつたことを思わせる。安自らも書には自信があつたらしく、獻之のために嵇

康の詩を書いて與えているが（王僧虔の論書）、獻之の書をあまり

高くかつていなかった（虞蘇論書表）。世説品藻篇には、

謝公問王子敬、君書何如家尊、答曰、固當不同、公曰、

外人論殊不爾、王曰、外人那得知、

とあり、注に引く宋明帝の文章志によると、安は同じ質問を羲之に向つても發している。二王の書の優劣については既にその當時から話題になっており、彼等自身はそれぞれに自己の優越と個性に基づく独自の書風を自負していたのである。これらの逸事を通して、彼等の間に書をあくまで藝術として扱おうとする意識のあつたこと、及び書の優劣比較が大きな關心事であつたことを知るのである。

書の美しさが鑑賞の対象とされてより、書跡の蒐集は逐

次盛んになったと思われるが、東晉名家の輩出はこの傾向にますます拍車をかけ、宮廷や顯門による蒐集の盛況ぶり

は虞蘇の「論語表」に詳しく記されている。例えば桓玄は

二王を好んで紙絹に書かれた正、行書の尤も美なるを撰び、各一帙を作つて常に坐右に置き、南奔するに及んで狼狽

の中にもそれを携行した（桓玄の書畫蒐集は、晉書、魏書の本。傳にも記されて特に有名であつた）。

また宋の明帝の時に虞蘇、巢尚之、徐希秀、孫奉伯等に詔

して整理せしめた二王及び漢魏以來の名筆の内譯が詳しく報告されている。装幀に當つては數種の書を上中下に分け

て、卷頭に上位のものを置き、中間には下位のものを並

べ、卷末に中位のものを配置して、鑑賞する時の心理的効果を狙っている。繪畫の發展とともに、書畫の名作の蒐集

はその後南朝に於ても盛行し、隋代に至ると法書名畫八百餘卷あり、文帝は觀文殿の後方、東に妙楷臺を、西に寶蹟

臺を起して、それぞれ古よりの法書と名畫を收藏したことが隋書經籍志に記されている。書畫の蒐集熱は鑑賞の仕方

にも一定の基準を立てようとする傾向を生じ、書畫論の展開される基礎となつたのである。

三 六朝の書論

顔之推は「顔氏家訓」雜藝篇の中で、江南の地方に「尺牘、書疏は千里の面目なり」という諺のあったことを紹介し、晉宋以來の風習として書法にはみな注意しており、急いで亂暴に書きなぐるような者はいなかった。そして彼自らも幼時より先祖の家業をうけて、その上に好きでもあったから、多くの法書を見てよく習ったが、遂に上達しなかったのは全く天分がなかったからである、と述べている。

顔氏は累代學問の家柄で、書の名手も多かった。^⑨かく言う之推自らも尺牘に工みであつたことが北齊書の本傳に特筆され、彼の五代の孫に有名な眞卿が出てゐる。

先の文章に續けて之推は、書の技能が他人に利用されることを戒めて、「しかし書藝に念を入れすぎゐる必要はない。そもそも巧者は勞し智者は憂うといとおり、能書の者はいつも人に役使されていよいよ累わしく感ずるもので、韋仲將（誕）の遺戒は全くもつともである」といい、王羲之、蕭子雲、王褒等が能書の故にかえて本來の才學が忘れられがちになつた例を擧げながら、「慎しみて書を以て自ら

命づくる勿かれ」と忠告している。ところが彼はここでも一方の書の擔い手のあることを指摘して、「しかし身分の卑しい人で、能書の故に拔擢された者も多いから、行き方が違えば一概にはいえない」と述べている。恐らく慕賢篇に記す丁覬等をその實例として意識していたのであらう。要するに之推は、士大夫の餘技や嗜としての書と、筆吏の職業的技能としての書の二種を、明らかに區別しており、彼自らは言うまでもなく前者の立場から書を學ぶ心得を説いているのである。彼が雜藝篇で列擧した書畫を始めとする諸藝は、「愁いを消し憤^{むす}れるを釋き、時に之を爲す可きもの」であつて、「以て兼明す可きものにして、以て專業とす可からざるもの」とされている。^⑩彼の藝能觀の根底には、「藝成而下、德成而上」（禮記）、「游於藝」（論語禮記）、「君子不器」（論語爲政）^{（爲政）}、といった類の經書の言葉が直ちに想起され、儒家の傳統的な價值觀に根ざしていることが明らかであるが、しかも藝能に對する廣い理解と修得を士大夫に必須の教養として重視しているのである。

さて、南朝の書の流れを概觀すると、既に指摘されているように、二王の祖述であり展開であつたと言えよう。即

ちその前半は主として獻之の法に倣い、後半は義之の體に範を求めた。南齊書劉休傳に

元嘉世、羊欣愛子敬正隸法、世共宗之、右軍之體微古、不復見貴、休始好此法、至今此體大行、

とあり、その事を端的に説明している。南朝の初めに獻之を學んだ者には、宋に羊欣を始め文帝、謝靈運、孔琳之、蕭思話、范曄、薄紹之、丘道護、駱簡等があり、齊では高帝、王僧虔等が知られている。ところが梁になると、顏氏家訓雜藝篇にも、

梁氏祕閣散逸以來、吾見二王眞草多矣、家中嘗得十卷、方知陶隱居、阮交州(研)、蕭祭酒(雲子)莫不得義之之體、故是書之淵源、蕭晚節所變、^⑩乃是右軍年少時法也、

と指摘されているように、梁代の名家である陶弘景、阮研、蕭子雲等は何れも義之の體を得ており義之七世の孫である陳の釋智永も、遠く義之の書を祖としたといわれる(書斷)。

南朝の初めに義之よりも獻之の書法が尊重されたのは、獻之に直接師事した者の多かったこと、獻之は父の法を改めて新しい書風を開き、これが南朝初期の氣風に合致したこと(後述)、などをその理由として擧げることができる。

東晉時代が、二王以下の名家の輩出によって、書の歷史の上に一つの頂點を記した後は、漸やく整理と批判の時期に入ったため、南朝では書そのものよりも、むしろ書論の發達が注目される。その主要なものとして宋の羊欣の「古來能書人名」、虞穌の「論書表」(泰始六年、四七〇年)、齊の王僧虔の「論書」「書賦」「筆意讚」、梁の武帝の「觀鍾繇書法十二意」「與陶隱居論書啓」「評書」、庾元威の「論書」、庾肩吾の「書品」、袁昂の「古今書評」(普通四年、五二三三年)などの文章が今日傳えられている。書以外の分野では、文學論に劉勰の「文心雕龍」、鍾嶸の「詩品」など、畫論に謝赫の「古畫品錄」、王微の「敘畫」、姚最の「續畫品」などが出て、魏晉以來それぞれの方面で孤立的に論議されてきたあらゆる問題が、時熟して自ら一つの藝術思想として集成統一される傾向にあった。^⑪

六朝の書論については既に先學にいくつかの優れた論考があるが、私はこれらの業績を參考しつつ書評論の形式とその基準となった重要な評語を検討し、あわせて大體の系統を立ててみたいと思う。

1、宋・羊欣「古來能書人名」

先ず羊欣（三六〇—四三二）については、宋書本傳に

欣少靖默、無競於人、美言笑、善容止、汎覽經籍、尤長

隸書、不疑（欣父）初爲烏程令、欣時年十二、時王獻之爲吳

興太守、甚知愛之、獻之嘗夏月入縣、欣著新絹襦畫腹、

獻之書裙數幅而去、欣本工書、因此彌善……游玩山水、

甚得適性……素好黃老、常手自書章、

とあって、彼の人と爲りの一斑を窺うことができる。王獻

之とのこの逸話は虞龢の論書表にも見え、彼が年少の頃よ

り獻之に親しく接してその書法を學んでいたことを思わせ

る。また名畫記（五卷）に引く劉義慶の世説に大司馬、桓溫が

常に顧愷之と羊欣に書畫を論じさせ、夜を徹して疲れを忘

れたという話は、彼が少くして書畫の批評に秀でていたこ

とをよく物語っている。

「古來能書人名」一卷は彼の撰述したものを齊の太祖高
帝の時に王僧虔が收録して上ったものであることは、本書
の序及び南齊書の王僧虔傳の記述によって明らかである。

内容は秦より晉に至る間の書人六十九人を擧げ、それぞれ
里籍、姓名、時代、官職、得意とする書體、書風の系統

（師承關係）及び書に關する逸事などを記したものである。その

前半衛瓘の項までの三十人中二十六人までは、書人名、説

明句ともに衛恒の四體書勢をほぼ踏襲して、わずかに陳遵、

韋少季（子）、鍾會（子）、衛瓘（子）の四人を補足し、後半は

これに準じて恒以後に出た名家を新たに追加したものであ

る。しかし四體書勢が書體の沿革史と筆勢の敘述を主要な

内容としたのに對して、能書人名ではまず名家一個人をと

り擧げ、その得意とする書體や書風の系統を記述してい

る。つまり從來の書體本位の筆勢論に代って、個人本位の

書人傳を立てたところに、この能書人名が書の評論史上に

占める重要な意義を認めることができる。以後南朝の書

論の多くがこれに倣って個人を單位としているのは、書に

於て漸やく個性が尊重され、精神の多様性が認識されるに

至ったことを示している。また能書人名が劉德昇に始まる

行書を特にとりあげ、鍾繇の行狎書を「相聞する者なり」

と説明し、衛瓘が張芝と父覲の法を折衷して作った草藁を

「相聞の書なり」と説明して、以下行草體を善くした書人

を列擧している所に、當時の尺牘用行草體の流行を認識し

た上での配慮が見られる。總じて能書人名の敘述は、得意

とする書體や師承關係、優劣の比較などに主たる關心が拂

われており、書そのものに關する批評は乏しいけれども、その中で多少とも書の内容を論じた評句を拾つてみよう。まず呉人皇象は草書を善くして、世に「沈着痛快」と稱せられたという。この言葉は、後世例えば嚴羽の「滄浪詩話」に詩の大概に二ありとして、「優游不迫」と「沈着痛快」をあげているように、文學論にも、しばしば使われる評句で、落ちついた中に快い爽やかさのある風趣を言つたものである。このように或る美の類型を立てて抽象的に概評することは、藝術の評論史から言えばよほど進んだ段階のものであつて、六朝の書論にその例は乏しいが、特殊のものとして注意すべきである。次に王獻之の項には、

王獻之、晉中書令、善隸篆、骨勢不及父、而媚趣過之、とあり、獻之の書を評するに「骨勢」と「媚趣」なる二つの概念を對比させて評價の基準としてゐる。骨勢とは骨力筆勢の略で骨格の優れた質實な力動感を表わし、媚趣とは妍媚な風趣を意味するのであらう。羊欣よりやや後に出た虞蘇の論書表にも、「獻之始めて父の書を學ぶ。……筆迹流憚、宛轉妍媚、は乃ち之に過ぎんと欲す」とあつてこれと同じ考え方に立ち、更に「夫れ古は質にして今妍なるは數

の常なり、妍を愛して質を薄んずるは人の情なり」と言つてここでは「質」と「妍」が對照されている。羊欣と書畫を論じた顧愷之の「論畫」にも、「奇骨有りて美好を兼ぬ」(伏義神農)とか、「天骨有れど細美少し」(漢本記)などと評して、骨格を形成する基本的な力と、これに肉付けして潤色する美麗さ、換言すれば「質」と「文」の二つの面から畫を評價している。文化現象を觀察するに文と質を以てする意識は中國の古い傳統であるが、それが藝術論の分野にも應用されるに至つたものと考えられる。

2、齊・王僧虔「論書」

王僧虔(四二六—四八五)については南齊書の本傳に書に關して次のような逸話が傳へられている。彼は書の名家琅邪の王氏に生れ、弱冠にして弘厚、楷書を善くした。かつて宋の文帝は彼の書する所の素扇を見て「ただ書跡が王獻之を逾えているのみならず、人物も雅よりそれ以上にちがいない」と稱讚した。同じく宋の孝武帝は書名を擅まゝにしうとしたので、彼は敢えて己れの書跡を顯わさず、大明年間には常に拙筆を用つて書し、此を以て容れられたという。また齊の太祖高帝は書を善くして、即位するに及ぶ

も篤く好んでやまなかった。かつて僧虔と書迹を比べて「誰を第一となすか」と尋ねたところ、「臣の書が第一です。陛下もまた第一です」と答えて帝を感心させたという。之によって彼が早くから書を善くし、自らも當時の第一人者であることを自負していたことが知られる。本傳には續いて、

（太祖）示僧虔古迹十一麥、就求能書人名、僧虔得民間所有麥中所無者具太皇帝、景帝、歸命侯書、桓玄書、及王丞相導、領軍洽、中書令珉、張芝、索靖、衛伯儒、張翼十二卷奏之、又上羊欣所撰能書人名一卷、

とあって、帝より能書人名を求められたが、恐らく卽座にできなかったので、羊欣の能書人名一卷を上つて之に代えたものと思われ、彼が評書の上で羊欣に、負う所の少なかつたことを想像させる。本傳には「論書」が收録されており、ほかに「書賦」の著の世に傳わつていたことが記されている。

法書要録卷一所收の王僧虔の「論書」には、書を論じた何編かの文章が混入されている。それらは恐らく時を異にして個別に書かれたものであろうが、何れも王僧虔の文章と

見てよいだろう。列舉して論述を加えた書人は漢魏より宋に及ぶが、漢魏を簡略にして晉宋に重點が置かれている。敘述は、本文にも「その優劣を辨じ」「その多少を較ぶ」などと言つてゐるように、品第に主たる關心が拂われ、特に羊欣が品第の一つの基準とされている。ここで論書に見

られる評語を検討してみると、まず張澄の書が當時「有意」と呼ばれ、范曄も同じく「有意」と評されている（王僧虔傳所收の論書に）。既に王羲之の言葉の中にも「點畫之間、皆有意、」

（自論）とか、「子敬飛白、大有意」（虞翻論書表）等の例があり、

胸中の意趣が書迹に十分表現された場合を評する一つの常套語であつたと思われる。

次に郗超の項には、

郗超草書、亞於二王、緊媚過其父、骨力不及也、

とあり、彼の草書が「緊媚」ではその父愔に勝るが「骨力」では及ばないとしている。同じく蕭思話の項にも、

蕭思話、全法羊欣、風流趣好、殆當不減、而筆力恨弱、

とあって、ここでは「風流趣好」と「筆力」が對應されている。更に謝綜の項にも「書法は力有れど、媚好少なきを恨む」として、同様に「力」と「媚好」の對應が見られる。

ほかにこれと関係のある用語を拾うと、「筆力」(王)「筆力驚絶」(張芝、張芝、(張芝)「天然絶逸、極有筆力」(孔琳、)「緊潔生起」)

(綜)「太傅之婉媚翫好、領軍之靜體蒼緒」などが擧げられる。總じて骨力筆勢に富んだ質樸な風と妍媚な美しさという二つの相對立する概念によって書を評價する傾向があり、これは羊欣や虞蘇に於て既に見られる所であつたし、降つて梁の庾元威の「論書」にも「余見學阮研書者、不得其骨力婉媚、唯學攀拳委盡」などといつて、骨力と婉媚の調和された美しさが、徒らに「攀拳委盡」に墮することを戒めている。

次に論書の宋文帝の項には、

宋文帝自謂不減王子敬、時議者云、天然勝羊欣、功夫不及欣、

とあつて、ここでは「天然」と「功夫」の二つの面から優劣が論じられている。孔琳之は二回出てきて、この論書には時を異にして書かれたいくつかの文章が混入している傍證ともなるが、

(一)孔琳之書、天然絶逸、極有筆力、規矩在羊欣後、

(二)孔琳之書、放縱快利、筆道流便、……但工夫少自任故

(放)未得盡其妙、故當劣於羊欣、

とあつて、ここでもやはり「天然」と「規矩」(工夫)が對照され、天然の表わされた効果が「放縱快利、筆道流便」であり、工夫のめざす所が「その妙を盡す」ことである。既に虞蘇の論書表にも羊欣が張芝を評した言葉として、「張字形不及右軍、自然不如小王」と見え、ここでは「自然」が「字形」と相對している。以上の例に見られる自然や天然(「天質自然」という用語の源流を探ると、古く老莊系統の古書に頻出する「自然」の概念に由來するものと考えられるが、書論では功夫、規矩、字形等という技巧や形式を意味する言葉と對稱されて、人間の生來の内面的な資質(精神)が作爲によらないでそのままに表現される美しさを言っているようである。このような精神と技巧、内面と外形という意識の立て方は、あたかも當時の思想界の中心テーマであつた所謂神滅・不滅論争に見られる精神と肉體の對照法とも一脈通ずるものがあるだろう。

王僧虔は別に彼の作と傳えられる「筆意讚」で、

書之妙道、神彩爲上、形質次之、兼之者方可紹於古人、

といつて、精神の美しい現われを上位として、技法の修練

による形態上の美しさを之に附随せしめ、兩者を兼有する者を古人に匹敵するとしている。彼は單なる言葉だけの批評家ではなく一面優れた書人でもあって、自ら「一賦を繕寫せんと欲して、暉采に傾遲し心目ともに勞す」(書論)といっているように、書作上の苦心と體驗がその書論の裏付となっている。揮灑の心理を分析しては、「心をして筆を忘れしめ、手をして書を忘れしむ。心手情を達し、書するに想を妄りにせず」(筆意)といつて一種の心手合一説を説き、更に「情は虚に憑つて有を測り、思は想に沿つて空を圖る。心は則を經め目は其の容を像どる。手は心を以て麾き、毫は手を以て従う」(書賦)と述べているが、ここには當時士大夫の間に普遍的であつた老莊や佛教思想の影響があつたかも知れない。單なる技巧の空轉は嚴に戒められるべきであつて、或いは虚・空に飛翔し或いは想念に沈潛する藝術的達觀の重視されている所に思惟の高まりを認めることができよう。

3、梁・武帝の論書

梁の武帝は歷代帝王のうち博識多藝の代表的存在とされているが、書の上からも注目に値する人物である。既に在

世當時から書名が高く、「草隸の尺牘は妙と稱せられざるなし」(南史梁本紀)、或いは「高祖雅より蟲篆を好む」(梁書劉孝綽傳)等と記されている。また書の評論には一家の見識を備えており、「觀鍾繇書法十二意」、「與陶隱居論書啓」、「評書」、「草書狀」等の書論が今日傳えられている。

法書要錄卷二所收の「梁武帝與陶隱居論書啓九首」は武帝が陶弘景と書の鑑識や蒐集について論じ合つた往復書簡である。梁書の陶弘景傳によると、武帝はつとに陶と交遊があり、卽位の後に及ぶも恩禮いよいよ篤く、書問絶えず冠漸相望むといわれ、この往復書簡にも君臣間の思想ないしは趣味上の交流が窺われる。そのうち帝が陶弘景に答えた第二書簡には帝の書に對する考えが最もよく現われている。まず筆法論を述べて、

夫運筆邪則無芒角、執手寬則書緩弱、點掣長則法離漸、畫促則字勢橫、畫疎則字形慢、拘則乏勢、放又少則、

とあり、運筆や執筆、更には點畫構成が書の形勢に及ぼす効果について詳しい論理的分析が試みられている。帝は別に「觀鍾繇書法十二意」①でも、文字の結構について平(謂橫也)

直(謂縱也)、均(謂圓也)、密(謂際也)の四種、運筆について鋒(謂端也)、力(謂體也)、輕(謂屈也)、決(謂率也)の四種、布置について補(謂不足也)、損(謂有餘也)、巧(謂布置也)、稱(謂大小也)の四種都合十二種の項目を擧げて簡単な説明を加えているが、ここではそれがより具體的に述べられている。更に書簡では筆墨による線條の基本的な性格を指摘して、

純骨無媚、純肉無力、少墨浮澀、多墨笨鈍、此竝皆然、任意所之、自然之理也、

とあり、骨と肉とが相對立されて、骨によって表わされるのが力であり、肉によって表わされるのが媚であつて、しかもそれらが墨量の多少とも關係づけられている。晉の衛夫人に「筆陣圖」があり後人の僞託とされているが、その中に「善筆力者多骨、不善筆者多肉、多骨微肉者謂之筋書、多肉微骨者謂之墨猪、多力豐筋者聖、無力無筋者病」と見え、武帝の説が一層整理された形になっている。筆墨による書線は單なる幾何學的な線條と違つて、それ自身或る廣がり、と内容を持ついる。書線を骨、肉、筋に區別するのは、恐らく人體構造からの連想であらうが、少なくとも魏晉の際には既に行われていたと考えられる。即ち魏の章

誕の言葉に「杜氏は傑れて骨力、有し字畫微か瘦せたり」(書斷章草)、或いは「崔氏の肉、張氏の骨」(書斷張芝)等とあり、衛瓘は伯英の筋を得、索靖は伯英の肉を得たといわれ(晉書衛瓘傳)、羊欣の評語にも「胡昭は劉德昇の骨を得、索靖はその肉を得、韋誕はその筋を得た」(書斷胡昭)とあり、降つて王僧虔の筆意讀にも「骨、豊かにして肉、潤う」等と形容されているのがその例である。しかしこれらの例に見られる骨、肉、筋は未だ比喩の域を脱しておらず、それらが書に於て持つ美の内容については明確にされていなかった。ところが梁の武帝になるとこの骨、肉説に羊欣、虞穌、王僧虔等に見られた骨勢と媚趣の二概念が導入され、骨と肉によって表わされる内容がそれぞれ力と媚、即ち骨勢と媚趣に對應することが始めて指摘されたのである。續いて帝は書美の理想を述べて云う。

若抑揚得所、趣舍無違、從事連斷、觸勢峰鬱、揚波折節、中規中矩、分間上下、濃纖有方、肥瘦相和、骨力相稱、婉婉曖曖、視之不足、稜稜凜凜、常有生氣、適眼合心、便爲甲科、

筆法的には自由な變化の中にも規矩を逸脱しないこと、骨

肉の按配が程よく、觀者に美しくはのかな様や、嚴しくりしい思いを抱かせ、しかも眼や心に何ら抵抗を感じさせない自然な調和を以て書の理想としている。程邈や張芝の例をあげつつ技法の修練を特に強調し、やがてそれが心の欲する所に従つて矩を踰えない精神の自由三昧の域に達することを學書の窮極の目標としているようである。

ところで書と畫は筆墨を同じくする所から見ても、線條の追求に於て頗ぶる密接な關係を有しているといえよう。顧愷之は「魏晉勝流畫讚」の模寫論の中で、用筆法から導かれるさまざまな線條の變化が、繪畫表現の根本理念である「遷想妙得」と緊密に結びついていることを指摘している。

用筆法と「骨法」思想の結合は既に彼に於て底流として見られたが、次いで謝赫が六法の一に「骨法用筆」を立ててより、畫の骨法は主として線條について言われ、用筆法が極めて重視されることとなった。後世書畫の一致は用筆法の同一を以て說かれる場合が多い。例えば名畫記卷二には、

夫象物必在於形似、形似須全其骨氣、骨氣形似、皆本於立意、而歸乎用筆、故工畫者多善書、

といい、宋の陸探微が張芝の始めた一筆書に倣つて一筆畫を作ったこと、梁の張僧繇の筆法が衛夫人の筆陣圖に依っているなどの例をあげて、書畫の用筆法の同一を説いている。特に書では線質が基本的な要素であるから、漢魏の筆勢論、骨肉説に始つて梁武の所謂「骨力肉媚」の説に至るまで、書の方で發達してきた線質の追求が、畫の骨法用筆の思想に與えた影響は決して少くなかったと思われる。

4、梁、庾肩吾「書品」一卷、

庾肩吾（四八七—五五一）は、梁書の本傳によると、八歳にして能く詩を賦し特に兄於陵の友愛する所となつた。簡文帝がまだ晉安王と號した頃から親しく仕えてその文學サロンに加わり、徐摛、陸杲、劉遵、劉孝儀、儀の弟孝威等とともに賞接を被つたといわれ、當時の文壇の中樞に身を置いていたことが知られる。また有名な庾信は彼の子である。肩吾の書名は既に武帝の評書、袁昂の古今書評など彼と同時代の書論にも記されており、後には唐の李嗣眞の書後品、竇泉の述書賦、張懷瓘の書斷にも論評されている。「書品」には初めに總序があり、作成の動機とその内容について述べられている。

余自少迄長、留心茲藝、敏手謝於臨池、銳意同於削板、而戴山之扇、竟未增錢、凌雲之臺、無因誠子、求諸故迹、或有淺深、輒刪善草隸者一百二十八人、伯英以稱聖居首、法高以追駿處末、推能相越、小例而九、引類相附、大等而三、復爲略論、總名書品、

彼は少時より書藝に心を留めている間に、古人の書迹に淺深優劣のあることを認め、漢より齊梁に至る草隸を善くした者一百二十八人(今本では一)を上中下に分け、更にこれを三分して九品とし、各品の後に略論を加えたものである。凡そものの優劣を比較品評する場合、このように等級をつけて品第するという精神的傾向は、書以外の方面でも古くから現われている。例えば論語に見える孔子の言葉の中には、人物を賢愚の程度に應じて上中下、或いは上智、中人、下愚という分け方をしたものがあり、漢書古今人表は論語の思想を繼いで、古今の人物を行爲の善惡に應じて上上(聖人)、上中(仁人)より下下(愚人)に至る九品に分類している。尙書禹貢では、禹が定めたと傳える九州の土、田、賦をそれぞれ九等に分けて評價している。魏晉南北朝時代の九品中正制度はいうまでもなく官吏登用法の九段階制であ

る。南朝になるとこれが藝術論にも應用されて、謝赫の古畫品録では、六法を基準として二十七人の畫人を六品に分け、鍾嶸の詩品では詩人百二十餘名を上中下三品に分けて品第している。書の方でも相互に優劣を比較する傾向はよほど古くからあったと思われるが、庾肩吾はそれらを綜合的に體系づけようとしたものであらう。

試みに書品の品第に上った書人計百二十三人を時代別に數字で表わすと次のようになる。

この表によると上品に上った十七人のうち、梁の一人を除くところごとく漢魏晉人によつて占められ、一般に時代を遡るほど優れたものが多いと考えられていること、また時代別では晉人が五十八人で全體の半數近くを占めていることが注目される。南朝でただ一人上之下に上げられた梁の阮研は肩吾の師であつたから(述書、賦上)、書品では彼を「今に居て古を觀、衆妙の門を盡窺す。復た王を師とし鍾を祖とすると雖も、終に別構の一體を成す」といつて特に高い評價を與えているのである。次に庾肩吾が書の優劣を判定した基準について見ると、それは羊欣、虞蘇、王僧虔以來の「天然」と「工夫」の法つまり精神と技巧の對照法に依

計	下			中			上			品等	時代
	下	中	上	下	中	上	下	中	上		
15			2	2	1	4	1	4	1		後漢
14	1	1	2	1	3		4	1	1		魏(吳)
58	17	7	7	9	7	7	3		1		晉
16	3	2	6	2	1	2					宋
9	2	3	1	2		1					齊
10		2	1	2	3	1	1				梁
123	23	15	20 (不明1を含む⑩)	18	15	15	9	5	3		計

(書人の時代は佩文齋書畫譜書人傳による)

っていると思われる。即ち上之上品に張芝、鍾繇、王羲之をあげ、之を論評して、

張工夫第一、天然次之、……鍾天然第一、功夫次之、王工夫不及張、天然過之、天然不及鍾、工夫過之、羊欣云、貴越群品、古今莫二、兼撮衆法、備成一家、という。張は工夫では第一だが天然では劣っている。鍾は

天然では第一だが功夫では劣っている。次に王を張と比べると工夫では及ばないが、天然では勝っている。鍾と比べると天然では及ばないが、工夫では勝っている。換言すれば張芝と鍾繇は特に優れたものを持っているかわりに、また劣った所もある。これに對して王羲之は天然と工夫何れにも偏しない平均した力を備えており、そしてこれが羊欣の「群品を貴越して古今二なし」という所以であるとしている。このほか上之中品に王獻之を論じて、「子敬泥帶、早驗天骨、兼以掣筆、復識人工」といって「天骨」と「人工」を對照させているのも同じ範疇の用語と考えられる。それでは天然と工夫はいかなる關係のもとに發揚されるのであるうか。「或いは横に牽き豎に掣き、或いは濃く點して軽く拂い、或いはまさに放たんとして更に留め、或いは挑んと欲してまた置く。敏思胸中に藏し、巧意毫毫に發す」といって、優れた技法を通して胸中に張詰めた意・思がそのまゝ筆端に現われてくるのを善しとするのであり、更に「若し妙を探り深きを測り、形を盡して勢を得れば、烟華紙に落ちて將に動かんとし、風彩字を帶びて飛ばんと欲す。神化の爲す所かと疑い、人世の學ぶ所に非ず」と。精

妙な技巧を通して天然の流露する時、神彩煥發の風趣はあたたかも畫の「氣韻生動」にも比すべく、もはや人間わざに非ずしてまさに神品といわねばならない。張芝、鍾繇、王羲之に於て見出した心手兼達の理想像が、書品を通ずる最大の價值基準となつていたと考えられる。

5、梁・袁昂「古今書評」

袁昂（四六一—五四〇）は特に書名のあつた人ではないが、書の品評に精通していたことは、本書の末尾に見える次の奥書からも窺われる。

右二十五人、自古及今、皆善能書、奉勅、遣臣評古今書、臣既愚短、豈敢輒量江海、但聖旨委臣、斟酌是非、謹品字法如前、伏願照覽、謹啓、普通四年二月五日、内侍中尙書令袁昂啓、

これによると、「古今書評」一卷は普通四年（五二三）に武帝の敕命を奉じて古今の書を品評したもので（昂はこの時六十三歳）、とり上げた書人の内譯を見ると、秦一後、漢六、魏（吳）四、晉五、宋三、齊一、梁五であつて、昂と同時代の梁人が比較的多い。彼が最も推稱するのは張芝、鍾繇、逸少（王羲之）、獻之でこれを四賢と稱し、ほかに羊欣の眞、孔琳

之の草、蕭思話の行、范曄の篆を各々一時の絶妙と賞讃している（今本では、この中、羊欣は二十五人の中に）。本書と類似のものに武帝の「評書」が知られている。兩者を比較すると評語が大同小異であるのみならず、語句が同じで書人の異なるものがあるなどの事實に照して、「評書」は袁昂のものをやや潤色して武帝の名に偽託したものとされている。しかし兩者を併わせて書論の一つの類型と見なして支障はないだろう。

この種の書論の著しい特色は、ほとんど全體が「某の書は……の如し」という所謂「比況法」の形成をとっていることである。これは、古く詩序の六義の一に「比」があげられ、鄭玄が「比者比方於物、諸言如者皆比辭也」（毛詩序疏）と注しているものに相當する。書を自然に譬えることは既に漢魏以來の筆勢論に見られたが、南朝では王僧虔の論書に、王獻之が王珣の書を戯れに評して、「弟書如騎驪駉、恒欲度驪驪前」と云つた例があり、これとほぼ同句が詩品の王僧達評にも採用されている。袁昂や武帝のものになると、比喩の素材は自然の風物に止まらず、彼等の生活を反映して、人物とくに道士、美女、貴族などの個性的な姿態

や行狀にまで廣がり、評句も四字ないしは六字の美しく洗練されたものになっている。次にいくつかの例を示すと、まず自然に譬えたものには、

鍾繇書、如雲鵠游天、羣鴻戲海、行間茂密、實亦難過、
王羲之書、字勢雄逸、如龍跳天門、虎臥鳳闕、故歷代寶之、永以爲訓、

蕭子雲書、如上林春花、遠近瞻望、無處不發、

などがあり、人物に譬えたものでは、

張伯英書、如漢武帝愛道、憑虛欲仙、
袁崧書、如深山道士、見人便欲退縮、
衛恒書、如插花美女、舞笑鏡臺、

徐淮南書、如南岡士大夫、徒好尙風範、終不免寒乞、

羊欣書、如大家婢爲夫人、雖處其位、而舉止羞澀、終不似眞、

などが挙げられる。これらの評句を通して、その本になった書跡の具體的な姿を描くことはもとより困難であるといわねばならない。しかし語句を仔細に検討するならば、書を評する基本的な觀點がいかなるものであったかを推測することは必ずしも不可能ではない。例えば袁昂は蔡邕を評

して「骨氣洞達、爽爽有神」といって、書の骨格形成に前提となる氣力の通達する所に「有神」という書の美的効果を認めようとしている。また王羲之の書を謝家の子弟に譬えて、「端正ならざるも爽爽として一種の風氣あり」とい、陶隱居を吳興の小兒に譬えて「形容未だ成長せずとも骨體甚だ駿快」といって、外に顯われた形態とともに、書の背骨となる精神的要素が重視されている。鍾繇を「意氣密麗、……行間茂實」と評するのも、内なる氣力の充實が外に現われて點畫構成の緊密感となることであり、「字勢屈強」(蕭思話)、「字勢蹉跎」(薄紹之)では特に筆勢に注意が向けられている。武帝の評書では、「放縱快利、筆道流便」(王彬之)、「疏散風氣、無一雅素」(惔郁)、「縱橫廓落、太意不凡」(惔郁)などの例があり、何れも縱横洒脫な風氣がそのまゝ書の上に表現されていることを評したものであろう。

四 六朝書風の變遷

ここで翻つて六朝の書風の變遷について概観してみたいと思う。吳人葛洪は、吳國の滅亡と晉室東遷の後に、江南

の人士が競って北方の文物を慕い、江南の古い風俗の棄て去られていく様を嘆いているが、書法に關しても「抱朴子」外篇（譏惑篇）に、

吳之善書則有皇象・劉纂・岑伯然・朱季平、皆一代之絕手、如中州有鍾元帝・胡孔明・張芝・索靖・各一邦之妙、竝用古體、俱足周事、余謂廢已習之法、更勤苦以學中國之書、尙可不須也、

と見え、吳の皇象、劉纂、岑伯然、朱季平以來傳えられていた古風な書法も、やがて北方の新しい書風の移入によって改變を免れ得なかつたことが明らかである。その主たる理由として、唐長孺氏が行書の流行を擧げているのは妥當な見解であろう。^⑧ここでは更にこれに續く東晉以後の南朝の書風がいかなる變遷を辿つたかを明らかにしなければならぬ。それはごく大雑把にいつて、質樸なものから妍媚なものへの移向であつたと考えられる。この著しい變化は東晉の後半に出た羲之と獻之、郗愔、郗超の二組の父子の間にも明らかに現われている。既述のように羊欣は獻之を評して「骨勢は父に及ばざるも媚趣は之に過ぐ」といい、王僧虔は郗超を評して「緊媚は其の父に過ぐるも骨力は及

ばざるなり」と言つて、何れも父が骨格の優れた質樸な風であつたのに對して、子の代になると妍媚な書風に變つてゐる。これはもちろん書者の資質の相違にもよるが、單にそれだけではなく、書風の上で一つの變革期が來ていたことを考えなければならぬ。羲之と獻之の差異については、既に宋の明帝の「文章志」（世說品藻篇注引）に、

獻之善隸書、變右軍法爲今體、字畫秀媚、妙絕時倫、與父俱得名、其章草疏弱、殊不及父、

とあり、獻之が父の法を變じて今體を作つたことを記すが、張懷瓘の「書估」にはより詳しい記述が見られる。

子敬年十五六時、嘗白逸少云、古之章草、未能宏逸、頗異諸體、今窮僞略之理、極草縱之致、不若藥行之間、於往法固殊、大人宜改體、逸少笑而不答（張の「書儀」「書斷」にもほぼ同文あり）

けだし、古法を改めて新しい時代の要求に合致した「今體」の創始は、「骨鯁を以て稱された」（晉書王羲之傳）羲之よりも「高邁不羈」（同王獻之傳）「少くして標邁、常貫を修めず」（北堂書鈔57檀道鸞晉陽秋）という性格の持主であつた獻之によつて實現されたのであろう。そして虞蘇はこのような書風の變遷

を眼の當りに觀察して、

夫古質而今妍、數之常也、愛妍而薄質、人之情也、鍾張方之二王、可謂古矣、且二王暮年、皆勝於少、父子之間、又爲今古、子敬窮其妍妙、固其宜也。(論書表)

といい、質朴なものより妍媚なものへの移向を歴史的必然とみなしたのであった。南朝初期の獻之體の流行は、妍を愛して質を薄んじた當時の氣風とよく呼應している。質より妍への移向があらゆる文化現象の歴史的必然であるとするれば、妍より爛へ向うのも推移の原則であろう。このような觀點からかりに書風の上で時代を區分するならば、質より妍への移向は晉宋の間にあり、妍より爛への移向は齊梁の間にあったと考えられる。齊末より華々しく開花する「雜體書」と呼ばれる裝飾的書法こそ爛熟した南朝貴族文化の一つの象徴といえよう。

從來、書體の分類として纏ったものには、説文の序に秦の八體(大篆、小篆、刻符、蟲書)があり、王莽の時に六書(古文、篆書、左書即秦隸、父書、隸書、奇字)があつて、何れもそれぞれの用途に應じて使用されてきたものであった。ところが南朝になると王愔の文字志目に三十六種の書體を挙げた中に、古文、大小

篆、隸書、草書、行書などといったごく普通のものと並んで、魚書、龍書、騏驎書、仙人書、雲書等という怪奇な書體の名が見え、これが所謂雜體書の記録に見える最初である。齊の蕭子良の「篆隸文體」には我が國に鎌倉時代の寫本が傳わっており、五十二體を擧げてそれぞれ作者の名を記し、四字ずつ例を示して、自然物が圖案化され文字構成に取入れられている状態を描いている。庾肩吾の書品序にも雜體書の名が見え、當時の書の一分野であつたことが明らかである。同じく梁の庾元威の「論書」によると、齊末よりこの傾向はますます盛んで、彼は正階侯のために十牒の屏風に書して百體を作り、うち五十體を純墨で他の五十體を采色で書いた。その百體の中には日月風雲より鼠牛虎兔龍などの名を冠した書體が列擧され、ほかに當時の書體は百二十體の多きに上つたという。このような絢爛たる裝飾趣味は當時の繪畫や庭園などにも見られ、^④南朝の藝術が妍媚、爛熟を過ぎて遂には形式的固定にまで陥つた一つの異端の系譜を示している。

一方これと時期を同じくして正統派の書風は、おおむね復古的傾向を辿っていた。即ち梁の武帝は「觀鍾繇書法十

二意」を作つて特に鍾繇を推稱し、「子敬の逸少に迫ばざるは、なお逸少の元常(鍾繇)に迫ばざるがごとし」と言つて古いものほど善しとする評價法をとり、これはそのまゝ蕭子雲や陶弘景の贊同する所となつた。^⑧ また既述のように書品が漢魏の古風を特に尊重し、袁昂が張芝、鍾繇、逸少(羲之)獻之を古今の四賢として推稱しているのもこのような復古的傾向の一つの現われといえよう。

む す び

以上、私は書が一箇の藝術として認識されるに至つた経緯をたどり、その間に試みられたいくつかの書論を検討してきたが、終りに六朝の書論が書の評論史上に占める意義を明らかにし、各項目について大體の系統を立てて、結びに代えたいと思う。

(一) 個人本位の書論が出現したこと。

(二) 評價の基準が提示されたこと。

(三) 品第と比況の形式が確立されたこと。

まず(一)について見ると、衛恒の四體書勢でも既に筆勢論や字體の沿革史に附隨して書人の名が記載されていたが、羊

欣の古來能書人名はこれをはつきりと個人本位に切替えた。王僧虔の論書はこの方法を繼ぎ、梁代に入ると庾肩吾の書品、袁昂の古今書評、武帝の評書等はみな個人を單位とする品評形式をとっている。これは書に於て個性が尊重され、精神の多様性が廣く認識されるに至つたからである。次に第(二)の評價の基準について見ると、大きく分けて①骨勢と媚趣の對照法と、②精神と技巧の對照法の二種となる。まず①の骨勢と媚趣の對照によつて書を論ずることは宋の羊欣に始まり、虞蘇の「古質今妍」の説、王僧虔の論書へと續く。梁武はこれに魏晉以來の「骨・肉」説を導入して「骨力肉媚」の原則を立てた。②の精神と技巧の二面から書を評價することは、まず羊欣による「自然」と「字形」の對照法に見られ、次いで王僧虔は「天然」「神彩」を、「工夫」「規矩」「形質」などと對照させて論じており、庾肩吾の書品ではこれを受けて、「天然」と「工夫」の高い調和に最高の價值を置いている。次に第(三)の品評形式であるが、品第法は庾肩吾の書品によつて、比況法は袁昂の古今書評や梁武の評書によつてそれぞれ一應確立された。

六朝の書論は以上のような成果を修めたけれども、そこには自ら未發達の要素や限界のあることも認めなければならぬ。例えば(一)觀者の立場から書かれた鑑賞論がほぼ全體を覆ひ、書者の立場からする創作論(運筆論や書の本質論)はわずかに王僧虔、梁武にその萌芽を見るにすぎないこと、(二)品評形式の上からいえば、書の美にいくつかの類型を立てて抽象的に概評する所謂「品藻法」の形式が未發達であること、(三)評價の基準となつた概念が未だ單純であること、(四)品第法に於ける書體のとり扱い方が不明確なことなどを擧げることができるが、これらはすべて唐以後の書論に於て逐次解決されるべき課題である。

註

- 書論のテキストは主として津逮秘書本の「法書要錄」に依つたが王氏書苑・墨地編・書苑菁華・古今法書苑本等も参照した。
- ① 漢志には六體に作るが、説文序段注に従つて八體をとる。八體については第四章を参照。
- ② 張安世は漢書59附張湯傳、王尊は同76本傳、嚴延年は90酷吏傳、馮嫺は96西域傳下。
- ③ 從來この時代に書を論じた言葉として、揚雄の「法言」問神篇

に見える「書心畫也」がよく人口に膾炙されているが、最近日原利國氏は「書は心の畫なり」の解釋への疑問(愛知學研究報告人文科學第十四輯)に於て、ここという書とは文字||文書・著述の意であつて、書の藝術性をいつたものでないことを論證しておられる。

- ④ 鴻都門學については、米澤嘉圓「漢代に於ける宮廷作畫機構の發達」下の(國華五。三七號)。

- ⑤ 神田喜一郎「汲冢書出土の始末に就て」(支那學第一卷)第三國志21劉劭傳注引く「文章敘錄」に「魏孫恒撰四體書勢」といつて、古文序、篆書序、草書序を載せ、同じく武帝紀注には隸書序を載せている。

- ⑥ 森三樹三郎「魏晉時代における人間の發見」(東洋文化の)福永光司「王羲之の思想と生活」(愛知學藝大學研究報告人文科學第九號)告人文科學第九號。

- ⑦ 之推の四代の祖騰之は晉に仕えて草隸を善くし(顏氏家、王僧虔の論書にも尺牘を善くしたことが見えている。三代の祖炳之も晉に仕えて能書の名があり(顏氏家)、父の協は梁に仕えて草隸、飛白を工みにし、荆楚の碑碣はみな協の書する所であつた(南史79。本傳)。

- ⑧ 吉川忠夫「顔之推小論」(東洋史研究二十卷四號)。

- ⑨ 「梁書35蕭子雲傳」子雲善草隸書、爲世楷法、自云、善效鍾元常王逸少、而微變字體、答敎云、臣昔不能拔賞、隨世所貴、規摹子敬、多歷年所、二十六著晉史、至二王列傳、欲作論草隸法、言不盡意、遂不能成、略指論飛白一勢而已、十許年來

- 、始見敕旨論書一卷、商略筆勢、洞澈字體、又以逸少之不及元常、猶子敬之不及逸少、自此研思、方悟隸式、始變子敬、全範元常、逮爾以來、自覺功進、
- ⑬ 中村茂夫「齊梁時代の藝術思想」(京都女子大學人)(文論叢第九號)。
- ⑭ 中田勇次郎「南朝の法帖」(書道全集第五卷所收)同「六朝人の書と書論」(淡交増刊(號No15))。中村茂夫著「中國書論の展開」。三原研田「書の成生期に關する一つの省察」(滋賀大學學藝學部紀要第七號)。六朝の書全體を扱つたものとして、西川寧著「六朝の書道」、中田勇次郎著「王羲之を中心とする法帖の研究」等。
- ⑮ 法書要錄卷一所收の王僧虔「論書」は少なくとも次の四段の獨立した文章からなる。(一)冒頭より「是以征南還有所得」まで、(二)「辱告並五紙、……方寸千言也」、(三)「承天涼體豫、不妄言耳」、(四)「鍾公之書」より末尾まで。論書の記事は、南齊書及び南史王僧虔傳、張懷瓘の書斷、寶泉の述書賦及び注、朱長文の墨池編、陳思の書苑菁華、梅鼎祚の文紀(全齊文8引注) 嚴可均の全齊文などにも引かれ、それぞれの説を見る

- ことができるが、詳しい考證は省略する。
- ⑮ 笠原仲二「自・然」(立命館文學第(八四)八六號)。
- ⑯ 武内義雄「書法十二意」(三省堂書苑)(七卷四號)。
- ⑰ 「四庫提要・書品」……惟唐之魏徵、與肩吾時代、幾不相及、而竝列其間、殊爲顛舛、故王士禎居易錄、詆毛晉刊本之謬、
- ⑱ 唐長孺「讀抱朴子推論南北學風的異同」(「魏晉南北朝」(史論叢)所收)。
- ⑲ 京都山科昆沙門堂藏(昭和十年古典保存會影印)。
- ⑳ 繪畫の例としては、與元威「論書」の末尾に、宗炳が瑞應圖を畫き、王融がこれを増定して凡て二百一十物を畫いたという。庭園については、村上嘉實「六朝の庭園」(古代學四)同「六朝の自然觀」(美術史三)。
- ㉑ 蕭子雲については注⑪、陶弘景については武帝との往復書簡を参照。